

小学生の表出性攻撃と不表出性攻撃に関する研究

朝長 昌三・福井 昭史・小島 道生
中村 千秋・小原 達朗・柳田 泰典

The Study on Expressive Aggression and Inexpressive Aggression of Elementary School Children

Shozo TOMONAGA, Akifumi FUKUI, Michio KOJIMA,
Chiaki NAKAMURA, Tatsuro OBARA, and Yasunori YANAGIDA

今日、学校において攻撃性に根ざしたと考えられる問題行動や犯罪が問題になっている。文部科学省の調査によると、2004年度に全国の公立小学生が学校内で起こした暴力行為は1890件で、前年度比で18%増になっていると報告している(2005)。また学校外での暴力行為も小学生は19%増の210件であったという。全国の児童相談所で非行相談を受け付けた子どもの30%は、親などから虐待されたことがあるとしている(2005)。また「攻撃性が高い」や「情緒不安定」といった何らかの心理的・精神的問題を抱える子どもは85%とも報告されている。

攻撃性は対人関係、適応上の問題、精神や身体の健康の問題をもたらす原因の一つとされている。そのような理由から、攻撃性に関する研究の歴史は古く、社会心理学、精神医学、比較行動学、大脳生理学といった領域を中心に研究が行われてきた。今日においては、健康心理学、行動医学、発達心理学、教育心理学といった領域を中心に研究が展開されている。

発達心理学や教育心理学を中心とした攻撃性の研究の特徴は、攻撃性の細分化と、攻撃性を個人の安定した特徴としてとらえるようになったことである。

攻撃性を生起させる可能性の高い刺激を受けた場合にとる反応型は、攻撃的反応型、非攻撃性直接的問題解決型、非攻撃性間接的問題解決型、無気力型が考えられる。

攻撃的反応型の場合、攻撃性は反応的攻撃と道具的攻撃に大別される。反応的攻撃とは、攻撃誘発刺激に対して怒り感情を伴って何らかの攻撃行動を示すことをいう。

反応的攻撃はさらに、反応的表出性攻撃と反応的不表出性攻撃に分類される。攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、その怒りによる最初の反応が直接的な行動として表に出た場合を反応的表出性攻撃といい、直接的には表に出ない場合を反応的不表出性攻撃という。

表出性攻撃は言語的攻撃と身体的攻撃に細分化され、不表出性攻撃は敵意を中心として細分化されている。しかしながら、小学生における攻撃性の研究では、小学生は言語的攻撃の未発達と身体的攻撃への社会的抑制力の未発達等が原因で、言語的攻撃と身体的攻撃の分化度が低いと考えられているため、反応的攻撃を表出性攻撃と不表出性攻撃の2分類までにとどめた方がよいとされている。

攻撃性は発達段階の早い時期に形成されるとされている。したがって、遅くとも学童期からその予防的試みを実施するのが望ましいと考えられている。

そこで、われわれは小学生の攻撃性の実態をしるために、小学生の攻撃性を反応的表出性攻撃（表出性攻撃）と反応的不表出性攻撃（不表出性攻撃）から検討することを目的として調査を行った。

方 法

被験者は、長崎市および近郊の小学生1191名（男児 578名，女児 613名）であった。

4年生は男児が171名，女児が212名，5年生は男児が196名，女児が200名，6年生は男児が211名，女児が201名であった。

調査は、小学生用攻撃性質問紙（HAQ-C：Hostility-Aggression Questionnaire for Children）を用いて行った。

本質問紙は27項目から構成されている。被験者は各質問に対して「まったくあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「よくあてはまる」、「とてもよくあてはまる」の4段階の1つに回答した。

結 果

結果の処理については、以下のように行った。

表出性攻撃の質問項目は4，10，11，12，13，15，20，22で，不表出性攻撃の質問項目は2，6，8，14，17，19，24，25であった。各質問項目に対して「まったくあてはまらない」には4点，「あまりあてはまらない」には3点，「よくあてはまる」には2点，「とてもよくあてはまる」には1点を加算し，その合計点を各被験者の表出性攻撃および不表出性攻撃の代表値としてt-検定を行い，以下のような結果を得た。

判定基準は表出性攻撃の場合，男子では「30～32」が「5 非常に強い」，「24～29」が「4 やや強い」，「17～23」が「3 ふつう」，「12～16」が「2 やや弱い」，「8～11」が「1 非常に弱い」で，女子では「29～32」が「5 非常に強い」，「22～28」が「4 やや強い」，「16～21」が「3 ふつう」，「10～15」が「2 やや弱い」，「8～9」が「1 非常に弱い」である。

不表出性攻撃の場合，男子では「27～32」が「5 非常に強い」，「20～26」が「4 やや強い」，「16～19」が「3 ふつう」，「11～15」が「2 やや弱い」，「8～10」が「1 非常に弱い」で，女子では「27～32」が「5 非常に強い」，「20～26」が「4 やや強い」，「15～19」が「3 ふつう」，「11～14」が「2 やや弱い」，「8～10」が「1 非常に弱い」である。

(1) 表出性攻撃と不表出性攻撃の比較

- ① 4年生～6年生の攻撃性（n=1191，男児：578，女児：613）

表出性攻撃； $\bar{x}=19.074$ （SD=5.131）

不表出性攻撃； $\bar{x}=17.177$ （SD=4.803）

$t=11.258$ （ $p<.01$ ， $df=1190$ ）

以上のように，小学校4年生から6年生全体の攻撃性は，表出性攻撃の方が不表出

性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。また判定基準では両方ともに程度は「ふつう」であった。

② 4年生の攻撃性（男児：171，女児：212）

表出性攻撃； $\bar{x}=18.261$ （SD=5.252）

不表出性攻撃； $\bar{x}=17.569$ （SD=5.19）

$t=2.219$ （ $p<.05$ ， $df=382$ ）

以上のように、4年生の攻撃性は、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。また判定基準では両方ともに程度は「ふつう」であった。

③ 5年生の攻撃性（男児：196，女児：200）

表出性攻撃； $\bar{x}=19.187$ （SD=5.226）

不表出性攻撃； $\bar{x}=17.101$ （SD=4.816）

$t=7.428$ （ $p<.01$ ， $df=395$ ）

以上のように、5年生の攻撃性は、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。また判定基準では両方ともに程度は「ふつう」であった。

④ 6年生の攻撃性（男児：211，女児：201）

表出性攻撃； $\bar{x}=19.721$ （SD=4.826）

不表出性攻撃； $\bar{x}=16.886$ （SD=4.384）

$t=10.336$ （ $p<.01$ ， $df=411$ ）

以上のように、6年生の攻撃性は、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。また判定基準では両方ともに程度は「ふつう」であった。

⑤ 4～6年生男児全体の攻撃性（ $n=578$ ）

表出性攻撃； $\bar{x}=19.924$ （SD=5.166）

不表出性攻撃； $\bar{x}=17.123$ （SD=5.095）

$t=11.583$ （ $p<.01$ ， $df=577$ ）

以上のように、4～6年生男児全体の攻撃性は、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。また判定基準では両方ともに程度は「ふつう」であった。

⑥ 4年生男児の攻撃性（ $n=171$ ）

表出性攻撃； $\bar{x}=19.895$ （SD=5.417）

不表出性攻撃； $\bar{x}=17.398$ （SD=5.614）

$t=5.245$ （ $p<.01$ ， $df=170$ ）

以上のように、4年生男児の攻撃性は、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。また判定基準では両方ともに程度は「ふつう」であった。

⑦ 5年生男児の攻撃性 (n=196)

表出性攻撃; $\bar{x}=19.485$ (SD=5.149)不表出性攻撃; $\bar{x}=17.077$ (SD=5.106) $t=5.924$ ($p<.01$, $df=195$)

以上のように、5年生男児の攻撃性は、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。また判定基準では両方ともに程度は「ふつう」であった。

⑧ 6年生男児の攻撃性 (n=211)

表出性攻撃; $\bar{x}=20.355$ (SD=4.959)不表出性攻撃; $\bar{x}=16.943$ (SD=4.637) $t=8.926$ ($p<.01$, $df=210$)

以上のように、6年生男児の攻撃性は、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。また判定基準では両方ともに程度は「ふつう」であった。

⑨ 4～6年生女児全体の攻撃性 (n=613)

表出性攻撃; $\bar{x}=18.272$ (SD=4.97)不表出性攻撃; $\bar{x}=17.228$ (SD=4.514) $t=4.543$ ($p<.01$, $df=612$)

以上のように、4～6年生女児の攻撃性は、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。また判定基準では両方ともに程度は「ふつう」であった。

⑩ 4年生女児の攻撃性 (n=212)

表出性攻撃; $\bar{x}=16.943$ (SD=4.731)不表出性攻撃; $\bar{x}=17.708$ (SD=4.831) $t=1.985$ ($df=211$) 有意差なし

以上のように、4年生女児の攻撃性は、不表出性攻撃の方が表出性攻撃よりも大であったが、統計的には有意な差はなかった。また判定基準によれば、表出性攻撃の程度も不表出性攻撃の程度も「ふつう」であった。

⑪ 5年生女児の攻撃性 (n=200)

表出性攻撃; $\bar{x}=18.895$ (SD=5.297)不表出性攻撃; $\bar{x}=17.125$ (SD=4.527) $t=4.567$ ($p<.01$, $df=199$)

以上のように、5年生女児の攻撃性は、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。また判定基準によれば、表出性攻撃の程度も不表出性攻撃の程度も「ふつう」であった。

⑫ 6年生女児の攻撃性 (n=201)

表出性攻撃; $\bar{x}=19.055$ (SD=4.601)

不表出性攻撃； $\bar{x}=16.826$ (SD=4.113)

$t=5.713$ ($p<.01$, $df=200$)

以上のように、6年生女兒の攻撃性は、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。また判定基準によれば、表出性攻撃の程度も不表出性攻撃の程度も「ふつう」であった。

(2) 表出性攻撃に関する性差

① 4～6年生の攻撃性

男児： $\bar{x}=19.924$ (SD=5.166)

女兒： $\bar{x}=18.272$ (SD=4.97)

$t=5.507$ ($p<.01$, $df=1189$)

以上のように、4～6年生の表出性攻撃は、男児の方が女兒よりも大で、統計的にも有意であった。

② 4年生の攻撃性

男児： $\bar{x}=19.895$ (SD=5.417)

女兒： $\bar{x}=16.943$ (SD=4.731)

$t=5.678$ ($p<.01$, $df=381$)

以上のように、4年生の表出性攻撃は、男児の方が女兒よりも大で、統計的にも有意であった。

③ 5年生の攻撃性

男児： $\bar{x}=19.485$ (SD=5.149)

女兒： $\bar{x}=18.895$ (SD=5.297)

$t=1.113$ ($df=381$), 有意差なし

以上のように、5年生の表出性攻撃は、男児の方が女兒よりも大であったが、統計的には有意な差はなかった。

④ 6年生の攻撃性

男児： $\bar{x}=20.355$ (SD=4.959)

女兒： $\bar{x}=19.055$ (SD=4.601)

$t=2.766$ ($p<.01$, $df=410$)

以上のように、6年生の表出性攻撃は、男児の方が女兒よりも大で、統計的にも有意であった。

(3) 不表出性攻撃に関する性差

① 4～6年生の攻撃性

男児： $\bar{x}=17.123$ (SD=5.095)

女兒： $\bar{x}=17.228$ (SD=4.514)

$t=.375$ ($df=1189$), 有意差なし

以上のように、4～6年生の不表出性攻撃は、女兒の方が男児よりも大であったが、統計的に有意な差はなかった。

② 4年生の攻撃性

男児： $\bar{x}=17.398$ (SD=5.614)

女兒： $\bar{x}=17.708$ (SD=4.831)

$t=1.403$ (df=381), 有意差なし

以上のように、4年生の不表出性攻撃は、女兒の方が男児よりも大であったが、統計的に有意な差はなかった。

③ 5年生の攻撃性

男児： $\bar{x}=17.077$ (SD=5.106)

女兒： $\bar{x}=17.125$ (SD=4.527)

$t=.098$ (df=394), 有意差なし

以上のように、5年生の不表出性攻撃は、女兒の方が男児よりも大であったが、統計的に有意な差はなかった。

④ 6年生の攻撃性

男児： $\bar{x}=16.943$ (SD=4.637)

女兒： $\bar{x}=16.826$ (SD=4.113)

$t=.266$ (df=410), 有意差なし

以上のように、6年生の不表出性攻撃は、男児の方が女兒よりも大であったが、統計的に有意な差はなかった。

(4) 表出性攻撃の学年変化

① 男児

4年生 * 5年生； $t=.732$ (df=365) 有意差なし

5年生 * 6年生； $t=1.74$ (df=405) 有意差なし

4年生 * 6年生； $t=.863$ (df=380) 有意差なし

以上のことから、男児の表出性攻撃は、6年生が最も高く、次が4年生で、5年生が最も低かったが、統計的に有意な差はなかった。

② 女兒

4年生 * 5年生； $t=5.422$ ($p<.01$, df=410)

5年生 * 6年生； $t=.32$ (df=399) 有意差なし

4年生 * 6年生； $t=4.591$ ($p<.01$, df=380)

以上のことから、女兒の表出性攻撃は、6年生が最も高く、次が5年生であったが、統計的に有意な差はなかった。また4年生が最も低く、5年生と6年生との間には有意な差があった。

(5) 不表出性攻撃の学年変化

① 男児

4年生*5年生； $t=.567$ ($df=365$) 有意差なし

5年生*6年生； $t=.279$ ($df=399$) 有意差なし

4年生*6年生； $t=.866$ ($df=380$) 有意差なし

以上のことから、男児の不表出性攻撃は、4年生が最も高く、次が5年生で、6年生が最も低かったが、統計的に有意な差はなかった。

② 女児

4年生*5年生； $t=1.273$ ($df=412$) 有意差なし

5年生*6年生； $t=.68$ ($df=399$) 有意差なし

4年生*6年生； $t=1.991$ ($p<.05$, $df=412$)

以上のことから、女児の不表出性攻撃は、4年生が最も高く、次が5年生で、6年生が最も低かったが、統計的に有意な差はなかった。

考 察

本研究では、小学校4年生、5年生および6年生の児童の攻撃性を、表出性攻撃と不表出性攻撃から検討することを目的とした。

小学生の場合、攻撃性の細分化は表出性攻撃と不表出性攻撃までが適当とされている(山崎ら, 2002)。このことから、本研究では、身体的攻撃と言語的攻撃ならびに短気を表出性攻撃、また敵意を不表出性攻撃とし、表出性攻撃と不表出性攻撃の段階で小学生の攻撃性について検討した。

(1) 表出性攻撃と不表出性攻撃の比較

4, 5, 6年生全体の攻撃性に関する全体像は、攻撃性の判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「3 ふつう」であったが、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であった。すなわち、攻撃誘発刺激を受けたとき、不表出性攻撃をとるよりも表出性攻撃を行うことが多いと考えられた。

これらの全体像をさらに検討するために、判定基準に従って各被験者の表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から攻撃性を分析した。

「4 よくあてはまる」と「5 とてもよくあてはまる」の表出性攻撃の強い児童は約25%で、不表出性攻撃の強い児童は約27%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、25%の児童が強い表出性攻撃をとり、また27%の児童が強い不表出性攻撃を行うと推測された。

さらに約10%の児童が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとると同時に強い不表出性攻撃も抱くことがわかった。

また「4」と「5」の表出性攻撃の強い児童で、不表出性攻撃が「3」以下の児童は約15%であった。逆に不表出性攻撃が「4」と「5」で、表出性攻撃が「3」以下の児童は約16%であった。これらのことから、41%の児童が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるか強い不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるものと推測された。

表出性攻撃および不表出性攻撃の程度の低い「2 やや弱い」と「1 非常に弱い」の児童は約13%であった。このことから、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、13%の児童は表出性攻撃も不表出性攻撃もとることはほとんどないと推測された。

4年生の攻撃性の全体像は、判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であったが、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意な差があった。すなわち、攻撃誘発刺激を受けたとき、不表出性攻撃よりも、表出性攻撃をとる児童が多いと考えられた。

4年生の攻撃性を、判定基準に従って表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から分析した。

表出性攻撃の強い児童は約20%で、不表出性攻撃の強い児童は約32%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、20%の児童が強い表出性攻撃をとり、32%の児童が不表出性攻撃をとると推測された。

さらに約11%の児童が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、強い表出性攻撃と強い不表出性攻撃を同時にとると考えられた。以上のように4年生の場合、表出性攻撃の平均値の方が不表出性攻撃の平均値よりも大であるにもかかわらず、不表出性攻撃の強い児童の方が表出性の強い児童よりも多いという結果であった。

また表出性攻撃の強い児童で、不表出性攻撃が「3」以下の児童は約10%で、逆に不表出性攻撃が強くて、表出性攻撃が「3」以下の児童は約20%であった。これらのことから、41%の児童が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるか強い不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるものと推測された。

さらに、表出性攻撃も不表出性攻撃も程度の低い「2」と「1」の児童は約13%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、13%の児童は表出性攻撃も不表出性攻撃もとることはほとんどないと推測された。

5年生の攻撃性に関する全体像は、攻撃性の判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であったが、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意な差があった。すなわち、攻撃誘発刺激を受けたとき、不表出性攻撃をとるよりも表出性攻撃をとる児童が多いと考えられた。

5年生の攻撃性を、判定基準に従って表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から分析した。

表出性攻撃の強い児童は約27%で、不表出性攻撃の強い児童は約26%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、27%の児童が強い表出性攻撃をとり、26%の児童が強い不表出性攻撃をとると推測された。

さらに約11%の児童が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、強い表出性攻撃と強い不表出性攻撃をもつことがわかった。以上のように5年生の場合、表出性攻撃の平均値の方が不表出性攻撃の平均値よりも大であるにもかかわらず、表出性攻撃の強い児童は27%で、不表出性の強い児童は26%という結果であった。

表出性攻撃の強い児童で、不表出性攻撃が「3」以下の児童は約16%であった。逆に不表出性攻撃が強くて、表出性攻撃が「3」以下の児童は約15%であった。これらのことから、42%の児童が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるか不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるものと推測された。

また表出性攻撃も不表出性攻撃も程度の低い「2」と「1」の児童は約14%であった。このことから、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、14%の児童は表出性攻撃も不表出

性攻撃もとるということはほとんどないと推測された。

6年生の攻撃性に関する全体像は、攻撃性の判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であったが、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意な差があった。すなわち、攻撃誘発刺激を受けたとき、不表出性攻撃をとるよりも、表出性攻撃をとる児童が多いと考えられた。

6年生の攻撃性を、判定基準に従って表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から分析した。

表出性攻撃の強い児童は約29%で、不表出性攻撃の強い児童は約24%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、29%の児童が強い表出性攻撃をとり、24%の児童が不表出性攻撃をとると推測された。

さらに約10%の児童が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとると同時に強い不表出性攻撃も抱くことがわかった。以上のように6年生の場合、表出性攻撃の平均値の方が不表出性攻撃の平均値よりも大であったことと同様に、表出性攻撃の強い児童は29%、不表出性の強い生徒は24%という傾向がみられた。

表出性攻撃の強い児童で、不表出性攻撃が「3」以下の児童は約19%であった。逆に不表出性攻撃が強くて、表出性攻撃が「3」以下の児童は約14%であった。これらのことから、43%の児童が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるか不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるものと推測された。

さらに、表出性攻撃も不表出性攻撃も程度が「2」と「1」の児童は約10%であった。このことから、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、10%の児童は表出性攻撃も不表出性攻撃もとるということはほとんどないと推測された。

以上のように、4年生から5年生、6年生と学年が上がるにつれて、表出性攻撃の強い児童は20%、27%、29%と増加傾向がみられ、不表出性攻撃の強い児童は逆に32%、26%、24%と減少傾向がみられた。また表出性攻撃も強く不表出性攻撃も強い児童は11%、11%、10%とほとんど変わらないという傾向であった。さらに、表出性攻撃の強い児童または不表出性攻撃の強い児童または両方ともに強い児童は41%、42%、43%であった。それに対して、表出性攻撃も不表出性攻撃も弱い児童は13%、14%、10%であった。

4、5、6年生男児全体の攻撃性の全体像は、攻撃性の判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であったが、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意な差があった。すなわち、男児が攻撃誘発刺激を受けたとき、不表出性攻撃よりも、表出性攻撃をとる児童が多いと考えられた。

4、5、6年生男児全体の攻撃性を、判定基準に従って表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から分析した。

表出性攻撃の強い児童は約24%で、不表出性攻撃の強い児童は約28%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、24%の児童が強い表出性攻撃をとり、28%の児童が強い不表出性攻撃をとると推測された。

さらに約11%の児童が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとると同時に強い不表出性攻撃も抱くことがわかった。以上のように男児の場合、表出性攻撃の平均値の方が不表出性攻撃の平均値よりも大であったにもかかわらず、表出性攻撃の強い児童は24%、不表出性の強い児童は28%という結果であった。

表出性攻撃の強い児童で、不表出性攻撃が「3」以下の児童は約13%であった。逆に不

表出性攻撃が強くて、表出性攻撃が「3」以下の児童は約16%であった。これらのことから、40%の児童が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるか不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるものと推測された。

さらに、表出性攻撃も不表出性攻撃も程度が「2」と「1」の児童は約13%であった。このことから、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、13%の児童は表出性攻撃も不表出性攻撃もとることはほとんどないと推測された。

4年生男児の攻撃性に関する全体像は、攻撃性の判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であったが、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意な差があった。すなわち、男児が攻撃誘発刺激を受けたとき、不表出性攻撃よりも表出性攻撃をとる男児が多いと考えられた。

4年生男児の攻撃性を、判定基準に従って表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から分析した。

表出性攻撃の強い児童は約25%で、不表出性攻撃の強い児童は約34%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、25%の児童が強い表出性攻撃を示し、34%の児童が強い不表出性攻撃をもつと推測された。

さらに約13%の児童が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとると同時に強い不表出性攻撃を抱くことがわかった。以上のように男児の場合、表出性攻撃の平均値の方が不表出性攻撃の平均値よりも大であったにもかかわらず、表出性攻撃の強い児童は25%、不表出性の強い児童は34%という結果であった。

表出性攻撃の強い児童で、不表出性攻撃が「3」以下の児童は約12%であった。逆に不表出性攻撃が強くて、表出性攻撃が「3」以下の児童は約19%であった。これらのことから、44%の児童が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるか強い不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるものと推測された。

さらに、表出性攻撃も不表出性攻撃も程度の低い児童は約30%であった。このことから、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、30%の児童が表出性攻撃も不表出性攻撃もとるといことはほとんどないことが推測された。

5年生男児全体の攻撃性に関する全体像は、攻撃性の判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であったが、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意な差があった。すなわち、男児が攻撃誘発刺激を受けたとき、不表出性攻撃をとるよりも、表出性攻撃をとる児童が多いと考えられた。

5年生男児の攻撃性を、判定基準に従って表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から分析した。

表出性攻撃の強い児童は約22%で、不表出性攻撃の強い児童は約26%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、22%の児童が強い表出性攻撃を示し、26%の児童が強い不表出性攻撃を抱くと推測された。

さらに約10%の児童が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとると同時に強い不表出性攻撃も抱くことが推測された。以上のように5年生男児の場合、表出性攻撃の平均値の方が不表出性攻撃の平均値よりも大であったにもかかわらず、表出性攻撃の強い児童は22%、不表出性の強い児童は26%であった。

表出性攻撃の強い児童で、不表出性攻撃が「3」以下の児童は約12%であった。逆に不

表出性攻撃が強くて、表出性攻撃が「3」以下の児童は約16%であった。これらのことから、38%の児童が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるか不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるものと推測された。

さらに、表出性攻撃も不表出性攻撃も程度の低い児童は約15%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、15%の児童は表出性攻撃も不表出性攻撃もとることはほとんどないと推測された。

6年生男児の攻撃性に関する全体像は、攻撃性の判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であったが、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意な差があった。すなわち、男児が攻撃誘発刺激を受けたとき、不表出性攻撃をとるよりも、表出性攻撃をとる児童が多いと考えられた。

6年生男児の攻撃性を、判定基準に従って表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から分析した。

表出性攻撃の強い児童は約25%で、不表出性攻撃の強い児童は約26%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、25%の児童が強い表出性攻撃をとり、26%の児童が不表出性攻撃をとるものと推測された。さらに約10%の児童が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとると同時に強い不表出性攻撃もとると推測された。以上のように男児の場合、表出性攻撃の平均値の方が不表出性攻撃の平均値よりも大であったにもかかわらず、表出性攻撃の強い児童は25%、不表出性の強い児童は26%というようにほとんど同じ結果であった。

表出性攻撃の強い児童で、不表出性攻撃が「3」以下の児童は約15%であった。逆に不表出性攻撃が強くて、表出性攻撃が「3」以下の児童は約15%であった。これらのことから、40%の児童が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるか不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるものと推測された。

さらに、表出性攻撃も不表出性攻撃も程度の低い児童は約10%であった。このことから、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、10%の児童は表出性攻撃も不表出性攻撃もとることはほとんどないと推測された。

4, 5, 6年生女児の攻撃性に関する全体像は、攻撃性の判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であったが、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意な差があった。すなわち、女児も男児と同様に攻撃誘発刺激を受けたとき、不表出性攻撃をとるよりも、表出性攻撃をとる女児が多いと考えられた。

4, 5, 6年生女児の攻撃性を、判定基準に従って表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から分析した。

表出性攻撃の強い児童は約27%で、不表出性攻撃の強い児童は約26%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、27%の女児が強い表出性攻撃をとり、26%の女児が強い不表出性攻撃をとるものと推測された。

さらに約10%の女児が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとると同時に強い不表出性攻撃ももつことがわかった。以上のように女児の場合、表出性攻撃の平均値の方が不表出性攻撃の平均値よりも大であったにもかかわらず、表出性攻撃の強い女児は27%、不表出性の強い女児は26%であった。

表出性攻撃の強い女児で、不表出性攻撃が「3」以下は約17%であった。逆に不表出性

攻撃が強くて、表出性攻撃が「3」以下の女兒は約16%であった。これらのことから、43%の女兒が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるか不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるものと推測された。

さらに表出性攻撃も不表出性攻撃も程度の低い女兒は約12%であったことから、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、12%の女兒は表出性攻撃も不表出性攻撃もとるといふことはほとんどないと推測された。

4年生女兒の攻撃性に関する全体像は、攻撃性の判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であったが、表出性攻撃と不表出性攻撃の間には、統計的に有意な差がなかった。すなわち、攻撃誘発刺激を受けたとき、相手に対して不表出性攻撃を抱く方が、表出性攻撃をとるよりもわずかに多いが統計的には差はなかった。

4年生女兒の攻撃性を、判定基準に従って表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から分析した。

表出性攻撃の強い児童は約16%で、不表出性攻撃の強い児童は約30%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、16%の女兒が強い表出性攻撃をとり、30%の女兒が強い不表出性攻撃をとると推測された。

さらに約10%の女兒が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとると同時に強い不表出性攻撃をもつことがわかった。以上のように、表出性攻撃の平均値の方が不表出性攻撃の平均値よりも大であったにもかかわらず、表出性攻撃の強い女兒は16%、不表出性の強い女兒は30%というように、強い不表出性攻撃をとる割合が大きかった。

表出性攻撃の強い児童で、不表出性攻撃が「3」以下の児童は約8%であった。逆に不表出性攻撃が強くて、表出性攻撃が「3」以下の女兒は約21%であった。これらのことから、39%の児童が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるかまたは強い不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるかであるが、4年生女兒の場合、強い不表出性攻撃をとる割合の方が大きいと推測された。

さらに、表出性攻撃も不表出性攻撃も程度の低い女兒は約14%であった。このことから、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、14%の女兒は表出性攻撃も不表出性攻撃もとるといふことはほとんどないと推測された。

5年生女兒の攻撃性に関する全体像は、攻撃性の判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であったが、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意な差があった。すなわち、5年生女兒も男児と同様に攻撃誘発刺激を受けたとき、不表出性攻撃よりも、表出性攻撃をとる女兒が多いと考えられた。

5年生女兒の攻撃性を、判定基準に従って表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から分析した。

表出性攻撃の強い女兒は約33%で、不表出性攻撃の強い児童は約26%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、33%の女兒が強い表出性攻撃を発生し、26%の女兒が不表出性攻撃をもつことが推測された。

さらに約10%の児童が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、表出性攻撃も不表出性攻撃もともに強いという結果であった。以上のように5年生女兒の場合、表出性攻撃の平均値の方が不表出性攻撃の平均値よりも大で、統計的にも有意であった。また表出性攻撃の強い女兒は33%、不表出性の強い女兒は26%であった。

表出性攻撃の強い女兒で、不表出性攻撃が「3」以下の女兒は約21%であった。逆に不表出性攻撃が強くて、表出性攻撃が「3」以下の女兒は約14%であった。これらのことから、45%の女兒が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるか不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるものと推測された。

さらに、表出性攻撃も不表出性攻撃も程度の低い女兒は約14%であった。このことから、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、14%の女兒は表出性攻撃も不表出性攻撃もとることはほとんどないと推測された。

6年生女兒の攻撃性に関する全体像は、攻撃性の判定基準によると表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であったが、表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意な差があった。すなわち、6年生女兒も男児と同様に攻撃誘発刺激を受けたとき、不表出性攻撃をとるよりも表出性攻撃をとる児童が多いと考えられた。

6年生女兒の攻撃性を、判定基準に従って表出性攻撃と不表出性攻撃の程度から分析した。

表出性攻撃の強い女兒は約33%で、不表出性攻撃の強い女兒は約22%であった。すなわち、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、33%の女兒が強い表出性攻撃をとり、22%の女兒が強い不表出性攻撃をとるものと推測された。

さらに約9%の女兒が攻撃誘発刺激を受け怒りを感じたとき、表出性攻撃も不表出性攻撃もともに強いという結果であった。以上のように6年生女兒の場合、表出性攻撃の平均値の方が不表出性攻撃の平均値よりも大で、表出性攻撃の強い女兒は33%、不表出性の強い女兒は22%であった。

表出性攻撃の強い女兒で、不表出性攻撃が「3」以下の女兒は約23%であった。逆に不表出性攻撃が強くて、表出性攻撃が「3」以下の女兒は約12%であった。これらのことから、44%の女兒が攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき、強い表出性攻撃をとるか不表出性攻撃をとるかまたはその両方をとるものと推測された。

さらに、表出性攻撃も不表出性攻撃も程度の低い女兒は約9%であった。このことから、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても、9%の女兒は表出性攻撃も不表出性攻撃もとるということはほとんどないと推測された。

(2) 表出性攻撃に関する性差

4, 5, 6年生全体の表出性攻撃に関しては、男児の方が女兒よりも大で、統計的にも有意であった。すなわち、男児の方が攻撃誘発刺激を受けたとき、表出性攻撃をとることが多いと考えられた。判定基準からみた場合、「4」と「5」は男児が24%、女兒が27%で、強い表出性攻撃を示す割合は女兒の方が大であった。

4年生の場合、表出性攻撃は男児の方が女兒よりも大で、統計的にも有意であった。判定基準からみた場合、「4」と「5」は男児が25%、女兒が17%で、4年生においては、強い表出性攻撃を示す割合は男児の方が大であった。

5年生においては、男児の方が女兒よりも大であったが、統計的には有意な差はなかった。判定基準からみた場合、「4」と「5」は男児が22%、女兒が33%で、5年生では、強い表出性攻撃を示す割合は女兒の方が大であった。

6年生においては、男児の方が女兒よりも大で、統計的にも有意であった。判定基準か

らみた場合、「4」と「5」は男児が25%、女児が33%で、強い表出性攻撃を示す割合は女児の方が大であった。

以上のように、強い表出性攻撃の現われる割合は、4年生では男児、5年生と6年生では女児であった。

(3) 不表出性攻撃に関する性差

4, 5, 6年生全体の不表出性攻撃に関しては、女児の方が男児よりも大であったが、統計的には有意な差はなかった。判定基準からみた場合、「4」と「5」は男児が28%、女児が26%で、強い不表出性攻撃を示す割合に関しても、男女の差はほとんどないと考えられた。

4年生の場合、女児の方が男児よりも大であったが、統計的には有意な差はなかった。判定基準からみた場合、「4」と「5」は男児が34%、女児が30%で、4年生においては、強い不表出性攻撃を示す割合は男児の方が大であった。

5年生においては、女児の方が男児よりも大であったが、統計的には有意な差はなかった。判定基準からみた場合、「4」と「5」は男女ともに26%で、5年生では、強い不表出性攻撃を示す割合は同じであった。

6年生の場合、男児の方が女児よりも大であったが、統計的には有意な差はなかった。判定基準からみた場合、「4」と「5」は男児が26%、女児が22%で、6年生においては、強い不表出性攻撃を示す割合は男児の方が大であった。

以上のように、強い不表出性攻撃の現われる割合は、4年生では男児、5年生では同じ、6年生では男児ということであった。

(4) 表出性攻撃の学年変化

男児の場合には、6年生が最も高く、次が4年生で、5年生が最も低かったが、統計的には有意な差はなかった。また強い表出性攻撃の現われる割合は、4年生と6年生が25%で、5年生が22%であった。

女児の場合には、6年生が最も高く、次が5年生で、4年生が最も低かった。また強い表出性攻撃の現われる割合は、5年生と6年生が33%で、4年生が17%であった。

(5) 不表出性攻撃の学年変化

男児の場合には、6年生が最も高く、次が4年生で、5年生が最も低かったが、統計的には有意な差はなかった。また強い表出性攻撃の現われる割合は、4年生と6年生が25%で、5年生が22%であった。

女児の場合には、6年生が最も高く、次が5年生で、4年生が最も低かった。また強い表出性攻撃の現われる割合は、5年生と6年生が33%で、4年生が17%であった。

要 約

小学生の攻撃性について小学生用攻撃性質問紙 (HAQ-C) を用いて、表出性攻撃と不表出性攻撃から検討し、以下のような結果を得た。

(1) 表出性攻撃と不表出性攻撃の比較

- ① 4年生, 5年生, 6年生全体の攻撃性は, 表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で, 統計的にも有意であった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。
- ② 4年生の攻撃性は, 表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で, 統計的にも有意であった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。
- ③ 5年生の攻撃性は, 表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で, 統計的にも有意であった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。
- ④ 6年生の攻撃性は, 表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で, 統計的にも有意であった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。
- ⑤ 4年生, 5年生, 6年生男児全体の攻撃性に関しては, 表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で, 統計的にも有意であった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。
- ⑥ 4年生男児の攻撃性は, 表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で, 統計的にも有意であった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。
- ⑦ 5年生男児の攻撃性は, 表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で, 統計的にも有意であった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。
- ⑧ 6年生男児の攻撃性は, 表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で, 統計的にも有意であった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。
- ⑨ 4年生, 5年生, 6年生女児全体の攻撃性に関しては, 表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で, 統計的にも有意であった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。
- ⑩ 4年生女児の攻撃性は, 不表出性攻撃が表出性攻撃よりも大であったが, 統計的には有意な差はなかった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。
- ⑪ 5年生女児の攻撃性は, 表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で, 統計的にも有意であった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。
- ⑫ 6年生女児の攻撃性は, 表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で, 統計的にも有意であった。また判定基準では, 両方ともに程度は「ふつう」であった。

(2) 表出性攻撃に関する性差

- ① 4年生, 5年生, 6年生全体の攻撃性に関しては, 男児の方が女児よりも大で, 統計的にも有意であった。
- ② 4年生の攻撃性は, 男児の方が女児よりも大で, 統計的にも有意であった。
- ③ 5年生の攻撃性は, 男児の方が女児よりも大であったが, 統計的には有意な差はなかった。
- ④ 6年生の攻撃性は, 男児の方が女児よりも大で, 統計的にも有意であった。

(3) 不表出性攻撃に関する性差

- ① 4年生, 5年生, 6年生全体の攻撃性に関しては, 女児の方が男児よりも大であったが, 統計的には有意な差はなかった。
- ② 4年生の攻撃性は, 女児の方が男児よりも大であったが, 統計的には有意な差はなかった。

- ③ 5年生の攻撃性は、女兒の方が男児よりも大であったが、統計的には有意な差はなかった。
- ④ 6年生の攻撃性は、男児の方が女兒よりも大であったが、統計的には有意な差はなかった。

(4) 表出性攻撃の学年変化

- ① 男児の表出性攻撃は、6年生が最も高く、次が4年生で、5年生が最も低かったが、統計的には有意な差はなかった。
- ② 女兒の表出性攻撃は、6年生が最も高く、次が5年生であったが統計的には有意な差はなかった。また4年生が最も低かったが、5年生と6年生との間には統計的には有意な差があった。

(5) 不表出性攻撃の学年変化

- ① 男児の不表出性攻撃は、4年生が最も高く、次が5年生で、6年生が最も低かったが、統計的には有意な差はなかった。
- ② 女兒の不表出性攻撃は、4年生が最も高く、次が5年生で、6年生が最も低かったが、統計的には有意な差はなかった。

参 考 文 献

- 木野和代 2000 日本人の怒りの表出方法とその对人的影響 心理学研究, 70, No.6, 494-502.
- 坂井明子・山崎勝之・曾我祥子・大芦治・島井哲志・大竹恵子 2000 小学生用攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討 学校保健研究, 42, 423-433.
- 坂井明子・山崎勝之 2004 小学生用 P-R 攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討 心理学研究, 75, 254-261.
- 坂井明子・山崎勝之 2004 小学生における3タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予期に及ぼす影響 教育心理学研究, 52, 298-309.
- 山崎勝之・坂井明子・曾我祥子・大芦治・島井哲志・大竹恵子 2001 小学生用攻撃性質問紙 (HAQ-C) の下位尺度の再構成と攻撃性概念の構築 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), 16, 1-10.
- 山崎勝之 2002 攻撃性の行動科学 ナカニシヤ出版